



文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教科調査官

豊口 和士

これからの書写・書道教育 (25)

平成29年3月に小学校・中学校、平成30年3月に高等学校の学習指導要領が改訂・告示され、令和2年4月に小学校、令和3年4月に中学校、令和4年4月に高等学校（年次進行）でスタートした新しい教育課程も、今年度をもって小学校、中学校、高等学校のすべての校種で実施されることになりました。

新しい学習指導要領の趣旨、新しい学習評価の考え方、GIGAスクール構想等に基づく学習指導もさらに充実していくものと思います。今後の改訂ですべての教科・科目において示された育成を目指す資質・能力の確実な育成に向けて、学校教育現場では不断の努力が続いていることと思います。学校だけでなく、社会全体で児童・生徒の学びと成長を支援してまいります。

本連載では、今次改訂を踏まえた、これからの書写・書道教育と、関連する事項について紹介していきます。

前回（令和6年7月号）まで、数回にわたって「書の美」ならびに「共通事項」に示された「書及び書の美を捉える上での四つの視点」について概説しました。少々難しい内容だったかもしれませんが、他の芸術に比べて、書というものがより複雑な要素を持ち、それらの要素がさらに複雑に関連し合い、相互に作用し合って成立しているためであり、

これらの複雑な要素とそれらにより生じる表現性や表現効果・風趣が鑑賞する側の経験に応じて捉えられることにより、書の美が感じ取られるということなのです。ですので、書を鑑賞し、書の美をどれほど感じ取ることができるかは、鑑賞する側がそれまでにいかに書と向き合ってきたかという経験が大きく影響してきます。

言うまでもなく、書の美を感じ取る上では、書と向き合う経験を通して得た知識が必要であり、書の美を形作る、書の時間性や運動性を感じ取るためには、書と向き合う経験を通して得た技能を駆使して、目の前

にある書の運動の軌道・軌跡、時間の経緯を辿ること（追体験）も必要になります。さらに、書と向き合う経験を通して得た知識や技能だけでなく、書と向き合い、書の美を感じ取る経験もまた重要であり、その経験の中で少しずつ磨いてきた「感性」が、書の美を感じ取る上で大変重要なものとなります。

では、例えば、日本とは全く異なる文化の中で書と向き合う経験をしてこなかった人には、書の美を感じ取ることができないのかと言え、決してそういうことはありません。書と向き合う経験がないということ、書と向き合いながら必要となる知識や技能を十分には持っていないということになりますが、「この書はすてきな」「この書は迫力があるな」「この書には品格が感じられるな」といった思いや感動を抱くことがあるかと思えます。それは、必ずしも書と向き合う経験はなくても、書と向き合うこと以外の経験を通して培った感性を働かせて書の

美を感じ取っているのだと思います。書と向き合う経験をしてきた人に比べれば、根拠に欠ける捉え方かもしれませんし、あくまでも直感的な捉え方にすぎないかもしれませんが、感性を働かせて書の美を感じ取ろうとしていることは確かでしょう。

逆に考えれば理解しやすいと思います。美には様々あり、絵画や彫刻、工芸、建築などの造形的な美、音楽、文学などの時間的な美、演劇などの

時空間的な美、さらには風景や眺望などの自然の美、人の振る舞いや行動・所作における美など、私たちの生活の中には様々な美があります。

私たちはこうした様々な美を必ずしも根拠を持って感じ取っているわけではありません。私たちは、様々な経験を通して培われる感性を統合して、様々な美と向き合っているのです。例えば、書と向き合う経験を通して培った感性は書の美を感じ取ることだけに働くわけではなく、書と向き合う経験を通して培った感性を基軸（中心、核）にして様々な経

験を通して培った感性と統合させて、様々な美を捉えています。同様に、書以外の経験を通して培った感性を基軸にして統合した感性により、書の美を捉えることも十分に考えられます。それゆえ、書と向き合う経験をこななかった人であっても、それぞれの生活・人生の中で様々な経験を背景にそこで培われた感性を働かせて、書の美を感じ取ることができるということなのです。

もちろん、残念ながら美に対する感性を培うための経験が十分でない場合には、直感的にであれ、美を感じ取ること自体に興味を抱けないかもしれません。あるいは、それまでの経験とは無関係に、初めて目にする美に感動することもあるかもしれません。

美に対する感性を培うための経験とは、必ずしも芸術を学ぶということだけではなく、生活の中の色々な場面で出会う、身の回りの様々な美を感じ取り、感動したり何かを感じたりする経験が大切なのだろうと思

います。親が子を色々なところに連れていたり、様々な経験をさせたりすることは、まさにそのための経験の機会なのでしょうし、子にとって将来そうした経験の具体的な記憶は薄れてしまっても、経験を通して感じたこと、感動したことは感性として積み重なっていきます。生活文化として書・書道が生活に根ざしている日本社会では、本人が意識しなくとも書に触れる機会は少なくないでしょうし、生活の中で知らず知らず書に感じる機会を積み重ねているのでしょう。

また、児童・生徒の皆さんが、学校での学習として、好き嫌いや得意不得意に関わらず、様々な教科・科目を学ぶこともまた同様で、将来どういう仕事に就くか、何に興味を持つて生涯関わり続けるかは様々なでしょうが、今現在は興味を抱けない学習内容であっても、それらの学習経験を通して培った見方・考え方（ここでは、感性と同等あるいは感性を含むものと捉えておく）が統合されて、

その人が生涯にわたって働かせる物事に対する見方・考え方（感性）を形作っていくこととなります。

書を学び、書の美と向き合う経験を通して、書の美はもろんのこと、身の回りの美、これからの人生の中で出会う様々な美、そして、物事の意味や価値を感じ取る感性を、皆さんには養ってほしいと思います。

高等学校学習指導要領解説では、「感性」を次のように示しています。

感性とは、外界の様々な刺激や表現されたものに対して鋭敏に反応する心の働きであり、価値や心情を感じ取る力であり、芸術を創造する根源をなすものである。ここでは、書の特質に根ざした東洋的・日本的な感性を意味し、表現された書のおよびや美しさを感じ、その意味や価値が捉えられる際の心の動きを示している。

（次回に続く。）